

平成 26 年度企画運営会議の報告

八ヶ岳総合博物館企画運営委員

岡野 勇二 沖野 外輝夫 小口 徹 木村 正弘 小山 明人
五味 嗣夫 田中 克明 濱 篤 両角 英晴

今までの経緯

平成 23 年度より検討を進め、懸案になっている茅野市八ヶ岳総合博物館の常設展示の更新および科学教育振興について、茅野市博物館協議会より平成 25 年 9 月に出された答申について、庁議規定に基づき平成 25 年 12 月に政策調整会議が開催された。この会議には副市長をはじめとし、企画総務部長・生涯学習部長・総務課・企画課・財政課・生涯学習課・文化財課の関係職員が出席した。会議の中では科学教育センターの機能を総合博物館に持たせるというが、そのなかの教員研修は県が行うことではないか、博物館を利用しての学校の授業より、博物館が学校へ出かけていくアウトリーチ的な活動が重要ではないか等様々な意見が出た。だが今後の事業進捗に重要な部分になる、建設や展示にコンサルタントを入れて、専門的な技術・情報の提供を求めていきたいという教育委員会の方針について、この会議では結論が出なかった。その結果、平成 26 年度予算査定では、総合博物館の中長期的な運営を含め、さらに検討を進めるようにということで検討委員会の予算だけが認められた。

この検討委員会は展示更新、科学教育振興についてのみ検討するのではなく、答申で提案されているような茅野市八ヶ岳総合博物館の中長期的な運営についても検討するようにと市長から指示があった。

そこで今年度は、茅野市八ヶ岳総合博物館管理規則第 22 条に規定されている博物館専門委員による企画運営会議を開催し、その中で①総合博物館の現状と課題、②答申を踏まえ、中長期的にどのような博物館を目指すべきか、③展示更新、科学教育振興を含め、目指す博物館実現への段階的手順について検討することにした。

会議は毎回事務局の用意した資料に基づいて館長が進行役を務め、懇談的にすすめた。また検討に当たっては茅野市の上位施策である、人も自然も元気で豊か、躍動する高原都市を目指す「茅野市民プラン」との整合性も考慮した。

検討結果報告

1 現状と課題

まず総合博物館の現状と課題について、委員間で共通認識して議論することから始めた。その中で、今までの経緯、茅野市の財政状況を鑑み、挙げられた課題を一挙に解決することは無理なので、出来るところから段階的に進めていくにはどうすればよいかということで検討を進めた。以下、共通認識した現状とそれについての意見である。

(1) 総合博物館の現状

<現状の予算について>

平成 26 年度の総合博物館の予算は約 5 千万円である。内、人件費と管理運営費は約 95%、事業経費は約 5% (約 270 万円) である。

<利用料収入について>

収入は入館料収入と講座等の参加費・受講料等の収入である。平成 25 年度の入館料収入は約 74 万円、参加費・受講料等の収入は約 35 万円で、合計 109 万円程度である。

<現状の事業内容について>

特別展示会（企画展示会）5 回、講演会 15 回、観察会（自然、歴史）18 回、古文書関係事業 19 回、講座 53 回、市民研究員養成講座が 5 グループで 80 回である。

<現状の利用者数>

年間利用者数は 11,000 人程度である。

<現状の職員>

館長（嘱託）1 名、正規職員（学芸員）2 名、臨時職員（月 2 日等、勤務日数は人によって異なる）4 名である。

(2) 現状の課題

<当面の課題として出された意見>

運営面

- ・ 事業予算と事業を推進する学芸員が他市の博物館と比較して少ない中でこなしている事業は限界に達している。

- ・ 年間利用者数が少ないのは PR 不足も影響している。PR については PR 手段が乏しく、情報発信不足である。PR にも関係するが現在のホームページはつまらない。独自のサーバを持ち、見る人と双方向性を持ったホームページにする必要がある。
- ・ 学芸員の業務内容が日常的管理運営事務の割合が大で、学芸業務の割合が小さいのは問題である。また、総合博物館ということで扱う分野が多いのに学芸員が不足している。早い時期での増員が望まれる。
- ・ 総合博物館ということで、目玉を作りにくい。八ヶ岳総合と捉える考え方もできる。

展示面

- ・ 情報、展示手法が古くなっていて魅力に欠ける。また、静的展示が多く、体験的展示が無いため面白くない。
- ・ 解説パネルは子どもには難しい。子ども向けの解説パネルが必要である。
- ・ 職員による日常的展示解説がない。
- ・ 特別展示室が八ヶ岳麓文芸館になっているため、特別展示事業が開催し難い。特別展示会開催には講堂を利用しているが、講堂を使っでの事業展開に支障が出ている。

調査研究面

- ・ 館の特徴を活かした調査研究のテーマがなく、現在行われている調査研究活動は微々たるものである。博物館活動の基本の一つでもある調査研究活動がおろそかになっている。地域博物館として地域の課題に応えるテーマを定め、しっかり調査研究をする博物館が望まれる。

資料収集面

- ・ 現状は館としてテーマを定めた積極的な収集活動はない。寄贈、寄託の申し込み者からの受け入れのみ。将来を見通した収集テーマに基づき収集し、収集資料を活かすことを考えるべきである。

教育普及面

- ・ 特別展、講座講演会、各種教室等の開催数は限界に近い。各事業の定員充足率を上げることを考慮すべきである。

その他

- ・ 他館、各種教育機関、異業種との連携がない。

2 未来に向けて段階的取り組み

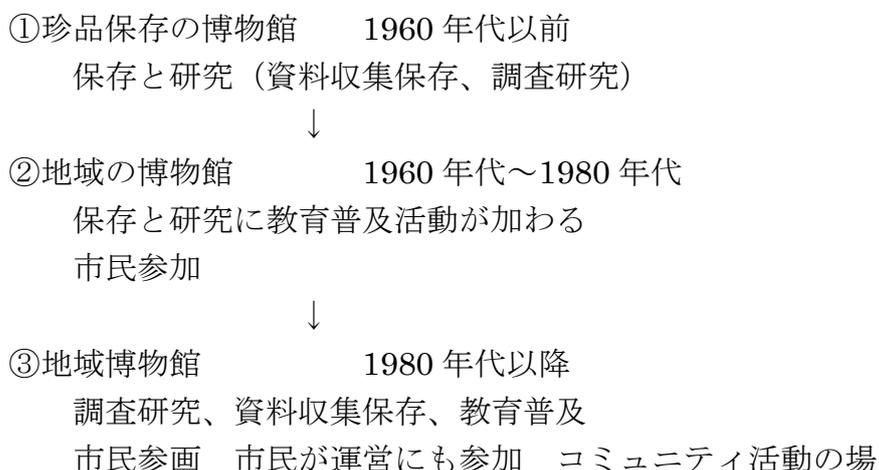
次に1の現状と課題を踏まえ、出された意見を加味した将来の目指すべき博

博物館について検討した。この検討では将来の博物館のあるべき姿として 10 年後の博物館をイメージすることから始めたが、その後そのイメージが我が国の未来の博物館、21 世紀の地域博物館に沿ったものかを検討した。その結果、始めにイメージした 10 年後の博物館像はこれから進みゆくと思われる我が国の地域博物館に沿ったものであった。

(1) 日本のこれからの博物館像

まず、日本の未来の博物館像を考えるために我が国の博物館の変遷について振り返ってみた。すると我が国の博物館は概ね以下の様な変遷をたどってきた。

日本の博物館の変遷



バブル期に地域に博物館が多く建設され、博物館には珍品を目玉にする博物館と地域史の解明、地域文化の向上、地域の環境保全など地域に根ざした活動を行なう地域博物館という 2 つの流れが生まれた。1988 年に開館している茅野市八ヶ岳総合博物館は珍品を目玉にする博物館ではなく、地域博物館として誕生している。変遷を眺めて注目すべきは、博物館の機能は時代とともに拡大されているが、基本的役割は地域の資料保存・保管であり、地域の調査研究であり、教育普及の拠点である。その博物館の基本的役割に近年は人材育成や地域の課題解決等の機能を新たに付加し拡大されてきている。今後、我が国の博物館がどのようなようになっていくか、どのような機能拡大が望まれるかを見据えることは、これからの総合博物館運営の中長期計画を立てる上でも重要なことである。

我が国のこれからの博物館は、おそらく今まで拡大されてきた機能である市民参加の意義と効果を発展させつつ、博物館の原則に立ち返り地域社会に新たな価値をもたらす文化、情報、人材の集積所としての機能が求められる時代にな

ると考えられる。とすれば、まず博物館に保存されている、あるいはこれから保存する博物館資料の利活用を通じて地域の価値を向上させることが望まれることになる。また、地域をより理解し地域の課題解決への貢献が求められる。更に他の博物館、教育機関、地域内企業、組織との幅広い強い連携が求められ、幅広く奥の深い博物館活動が求められることになる。このような時代のニーズに応えるには、地域の課題を解決する研究や担い手の育成、また地域の資料、文化に関する情報の収集と幅広い公開発信が必要である。また、地域密着性を向上させるために、活発なアウトリーチも求められると予想される。そしてそれらを産学民公が連携して推進することが求められる。従ってこれらの新たな機能を付加したこれからの地域博物館は次のようになると考えられる。

21 世紀の地域博物館

調査研究、資料収集保存、教育普及

市民参画 市民運営にも参加 コミュニティ活動の場

地域社会に新たな価値創造の拠点 情報、文化、人材の集積所

双方向の情報ネットと出前

他業種との連携

付加される新たな機能を具体的事業としてみると次のようになる。

博物館資料の活用	資料に光を当て、地域価値を向上させる	地域価値についての学習及びPR, 情報発信
地域課題の解決	地域課題解決の手法研究および担い手の育成	大学等教育機関との連携 市民研究員の養成 博物館を支える市民の会
他施設、組織との連携	幅広く奥の深い博物館活動	連携への働きかけ 連携事業の計画と実施
地域資料、地域文化に関する情報の公開と発信	地域資料、地域文化に関する調査研究と資料・情報収集とデジタル化	独自のHPを使った双方向の情報発信 地域価値の発信と向上
活発なアウトリーチ活動	地域密着性の向上	出前博物館事業 市民研究員 博物館を支える市民の会

(2) 総合博物館の中長期計画「総合博物館3・3事業計画」

以上を踏まえ、21世紀の地域博物館としてふさわしい総合博物館の姿を目指して、以下の様な中長期計画をまとめた。この計画は第1期が基盤づくり、第2期が基盤と事業の拡大、第3期が発展と充実である。1期3年をめどに実行するもので、総合博物館3・3事業計画とよぶ。

目 標	年 度	重点事業	備 考
博物館活動を支える基盤作り	2013	収蔵資料の整理とデジタル化 市民研究員養成開始	資料の利活用へ 博物館を支える担 い手育成
	2014	市民研究員養成 出前事業 企画運営会議	地域価値の向上 アウトリーチ的活 動へ
	2015	市民研究員養成1期目終了 出前事業拡大 展示更新、科学教育振興具体案 インターネットを活用した情報発信体 制の構築	地域課題解決へ 地域密着性の向上
博物館活動 基盤と事業 拡大	2016	市民研究員養成分野の拡大と自主的活 動推進 出前事業拡大 活発な情報発信 学校教育連携 仕組み作りと試行 一部地質展示更新とコンテンツ作り 科学教育振興 体験室増設 収蔵庫に自然資料収蔵棚増設	支える会の発足 デジタル化時代対 応 体験室、特別展示室 復活、モバイルプラ ネタリウム
	2017	市民研究員による活発な博物館活動 出前事業拡大充実 活発な情報発信 学校教育連携 産学公民連携 仕組み作りと試行 一部自然展示更新とコンテンツ作り 科学教育振興関連事業の充実 収蔵庫に自然資料収蔵棚増設	(体験室、特別展示 室復活、モバイルプ ラネタリウム)

	2018	市民研究員養成第2期目終了 市民研究員の活動 活発な博物館活動 出前事業拡大充実 活発な情報発信 学校教育連携 産学公民連携 一部歴史・養川・文芸展示更新 コンテ ンツ作り 科学教育振興関連事業の充実 収蔵庫に自然資料収蔵棚増設	(体験室、特別展示 室復活、モバイルプ ラネタリウム)
博物館活動 の発展と充 実	2019	市民研究員の活動 活発な博物館活動 出前事業充実 活発な情報発信 学校教育連携 産学公民連携 展示全面更新準備 展示と館外とのつながり 科学教育振興関連事業の充実と増築準 備 収蔵庫に自然資料収蔵棚増設	
	2020	市民研究員の活動 活発な博物館活動 出前事業充実 活発な情報発信 学校教育連携 産学公民連携 展示全面更新 市全域が展示室 科学教育振興関連事業の充実と増築 収蔵庫に自然資料収蔵棚増設	科学教育棟 プラネタリウム
	2021	市民研究員養成第3期目終了 市民研究員の活動 活発な博物館活動 出前事業充実	自然系収蔵庫 (既存収蔵庫に増 設した棚を移動)

		活発な情報発信 学校教育連携 産学公民連携 市域に広がる展示学習 科学教育振興関連事業の拡大充実	
--	--	--	--

この3・3事業計画を推進するためには、市の予算を当てにするだけではなく、補助金、助成金の類を導入するなどの努力をして、予算的な裏付けを得ることはもちろんである。進める事業の根幹になるのは次の4つである。

- ・ 博物館活動の担い手になる市民研究員
- ・ アウトリーチ活動
- ・ 産・学・公・民連携
- ・ デジタル化時代対応

これらを柱に枝葉を伸ばしながら、これに絡み合わせるように懸案の展示更新、科学教育センター構想実現を目指していくことが重要である。そして10年後の博物館はこうありたいと目指すべき今後の博物館として、当委員会で到達目標として最初に検討したのが以下である。

未来の総合博物館 10年後
<ul style="list-style-type: none"> ・ 八ヶ岳を中心に総合的に扱う博物館として、ウィークデーは学校団体、土日祝日は家族連れで賑わう年間入館者数5万人博物館 ・ 活発な地域を対象にした博物館活動、即ち地域の調査研究活動、資料収集保管活動、教育普及活動を行なう生涯学習施設であり、地域研究の拠点、地域情報の発信基地 ・ 市民参加による活発な博物館活動を行う市民研究員、ボランティア等多くの市民が出入りする、市民に支えられた、市民によって高められる、市民のための博物館 ・ 出前講座等活発なアウトリーチ活動を行う、身近な博物館 ・ 産学公民連携した幅広い奥の深い事業展開 ・ 博物館独自のホームページ等インターネットを活用した、活発な双方向の情報発信をし、地域の人、観光客等多くのニーズに応える博物館 ・ 展示は全体的にリニューアルをし、スマホ、タブレット等デジタル機器を活用したバーチャルで楽しい体験を通して自らの学習を深めるとともに、館外の自然や遺跡等にリンクし、その場所に導ける展示 ・ 自然、歴史、民俗、文芸に1人ずつの学芸員配属 ・ 学芸員、市民研究員による活発な調査研究活動の様子、成果は常に紙ペー

ス、オンラインで発信するとともに、ミニ展示や企画展示にして市民に還元する

- ・ 収蔵品情報を全国から検索できる収蔵システムを持った自然資料、人文資料別の収蔵庫。自然収蔵庫の燻蒸はDNAを破壊しない配慮がされている
- ・ 増設されたプラネタリウム付き科学教育棟を使用して、活発な科学教育振興の事業展開を行う

3 展示更新・科学教育振興・自然系収蔵庫

(1) 展示更新

<展示更新についての検討>

すぐ出来る事としては、利用されていない壁面、空間を有効利用して、現実にはすぐわかない古い情報を修正した手作りの解説パネル、小学生向きの展示解説パネルの設置、身近な自然情報コーナーの設置、昔のくらし体験コーナーの設置、八ヶ岳紹介写真の増設などがある。手作りでできるものはすぐ実施し、予算が必要なものは、見積を取り予算要求しなければならない。また、現在の展示室は暗すぎる、もっと明るくすべきである。

学校団体の利用を促進するためには、校長会の協力を得て学校の博物館係りの教員を通じた学校への働きかけが必要である。

今後の展示更新の方針としては、現在の展示を活かした部分改修を進め、時期を見て全面改修をする。部分改修は全面改修に活かされることを見込みつつ、次のように進めるとよい。

- ① まず、スマホ・タブレットを導入する。そのシステムを決定する
- ② 地質コーナーから年々順次、自然、歴史、文芸コーナーへ
- ③ 年々コンテンツを充実する
- ④ エプソンのヘッドマウントディスプレイ（モベリア）を導入する等して既存のジオラマをバーチャルな空間にする等、既存展示を生かして魅力ある展示空間を実現することも視野に入れる
- ⑤ 来年度は地質コーナー、自然コーナー、歴史コーナー、文芸コーナーの部分改修の青図を作り見積りをとる
- ⑥ 予算要求し、順次年々改修を実現していく
- ⑦ 全面更新は時期を待つ

だがスマホ・タブレット導入にどのようなシステムを使うか、どういうデジタル情報を入れたコンテンツを作るのがよいのか、それにはどのくらいの費用がか

かるのかについては、当企画運営員会のメンバーでは詰めることが出来なかったため、来年度に作業部会を設け、必要に応じて専門家や業者を招聘し、経費を盛り込んだ詳細計画を立案するのが望ましい。

(2) 科学教育振興

科学教育振興については、すぐに取り掛かりたいこととして、既存の部屋を改修して体験室をつくることと、モバイルプラネタリウム(移動式簡易プラネタリウム)を導入し、それらを運用しながら少しでも科学教育振興を推進すること。その上で答申内容を段階的に実現していくことが望ましい。

① 科学教育振興(まず部屋の改修)

科学教育振興について現在博物館で実施していることは、年1回の研究創意工夫展の開催と表彰、毎月1回開催している子ども科学クラブ、子ども実験工作クラブ、夏休みに5回開催している夏休み子ども教室である。また、担う人を育てることを目的に、科学的な実験工作に精通した市民研究員を養成中である。科学教育振興を推進するためには、答申にある科学教育振興棟の増設が一番望ましい。しかし、それにはかなりの予算が必要であり、早急な実現は望めない。そこで、既存建物を使って少しでも科学教育振興を進めなくてはならないが、現時点での一番のネックは科学的な実験工作を含め体験する部屋・場所がないということである。そのため子ども実験工作クラブは諏訪東京理科大学のアゼンブリーホールを使わせてもらい実施している。体験室を1室増設できれば、子ども実験工作クラブのみならず多くの体験的な事業展開が可能になるとともに、博物館を訪れる学校団体の各種体験や学習をする事の出来る場が確保でき、学校団体利用の促進をはかり、博物館を活性化させることが出来る。そこで既存建物を部分改修して、科学教育振興ばかりでなく総合的に博物館を活性化させる方策はないかということを検討した。以下にその結果を記す。

- ・ まず既存施設を一部改修して体験室を1室作り、早急に活動を活発にできるようにする。例えば現在の研究室・閲覧室を改修して実験工作室を作る。
- ・ 入り口奥のロビー吹き抜け部分に天井を張り1室増設し、研究室・閲覧室を使って実施していた会議・講座・市民研究員の作業等をする場所を確保する。
- ・ 文芸館を養川コーナーに移設して文芸コーナーとし、養川コーナーを講堂に付加して特別展示室を復活させる。養川コーナーを付加した講堂は養川の映像だけでなく、科学的な映像も含め多目的な映像室、多目的な会議や講演等の出来る部屋にする。

以上を早急に行い、次の段階で答申に載っていて既存建物に取り込めない部分を増築するというように段階的に進めたい。答申にあつて既存建物に取り込め

ない内容で、今後増築を予定する部分としては

- ・ 実験室、実験準備室、プラネタリウム等
- ・ 自然系収蔵庫等

であり、これらの施設充実を段階的に進める。ただ、早急に進めたい既存施設の一部改修についても、水道やガスの設備を設けるにはどうするのか、費用はどのくらいかかるのか等は、展示更新と同じく当企画運営会議の委員では図面や見積りを出すことは出来ない。そこで来年度は作業部会を立ち上げ、必要に応じて専門家、業者を招き、見積りを含んだ具体的な段階的事業計画を作成する。事業計画は今後を見通した運営計画、指導者の手立ての方策、生徒の輸送手段、およびランニングコスト等を盛り込んだ詳細な具体案を作成する。

② モバイルプラネタリウム（移動式簡易プラネタリウム）

天文・宇宙への関心の深まる中、学校で扱いつらい教材である天文分野の教具として威力を発揮するだけではなく、宇宙への関心を深め、夢と希望を与えるプラネタリウムの設置については、入館者数増加も視野に入れて以前の答申にも謳われている。しかし、財政状況の厳しい現状ではすぐに大型のプラネタリウムを設置することは難しいので、当委員会ではすぐ出来る事として、アウトリーチ的活動にも結び付くモバイルプラネタリウム導入について検討した。これにはプラネタリウムの専門家である現館長が在職中に、基礎づくりと後継の人材を育ててもらいたいという願いもある。どこへでも移動できる、エアドーム（直径6m、子ども40人収容）と投影装置だけのモバイルプラネタリウムを、次のような運営計画をたて早急に導入するように提案する。

- ・ 移動式簡易プラネタリウム。博物館ロビーでの公開だけでなく出前もできる。
- ・ 機器類はリースにし、ランニング経費は極力抑える。
- ・ 1人で扱える（運搬、設置、投影、解説）。
- ・ 番組づくりは市民もかかわることができ、主として自作（市民研究員の養成）。
- ・ 観覧する対象に合わせたキメの細かい投影。

一般投影 土・日・祝 午前1回 午後1回 博物館ロビー	学習投影 ウイークデー 要請を受け館内または学校へ出前	特別投影 適宜 館内または出前
毎月話題を変えた月別の投影（1年間通して観	幼児向け番組 春 夏 秋 冬	教員研修 市民製作番組

覧すると1年間の星座と折々の天文現象や天文の初歩的な事柄がわかる)	学年別学習投影 1年、2年、3年、4年、 5年、6年、中1、中2、 中3	癒しの投影 その他特殊投影
-----------------------------------	---	------------------

(3) 自然系収蔵庫

諏訪地域の自然についても扱う総合博物館としては、地域の自然の標本や記録等の資料を年々蓄積し、後世に伝えていかなければならない。その資料を収蔵し保管するのが収蔵庫である。博物館の心臓である収蔵資料を収蔵する収蔵庫の現状は、古い民具等ですでに満杯に近い状態である。また、現在収蔵されている自然資料は、動物・鳥類の剥製、植物の写真、八ヶ岳の礫である。地域博物館としての活発な活動を目指す総合博物館としては、現在の自然の記録をもっと幅広く残すため、腊葉標本、キノコの標本等、地域の自然の調査研究をしつつ自然資料を精力的に収集収蔵していかなければならない。収蔵庫は収蔵品の虫喰い、腐敗劣化を防止するため燻蒸処理をしなければならないが、自然資料の場合DNAを破壊しない燻蒸が必要である。しかし、現在の民俗資料の多い収蔵庫は、その配慮はなされていない。そこで、①現在収蔵庫は満杯に近い状態で自然資料を収蔵するスペースは極めて狭い、②DNAを破壊しない燻蒸がされていない、③今後市民研究員の活発な活動により自然資料が大量に収蔵される、ということから自然系収蔵庫の増設の必要性が以前の答申に盛り込まれたという経緯がある。だが自然系収蔵庫増設は即座に望める状況ではないので、これも出来るところから段階的に進めることを検討した。その結果、市民研究員の自然分野の数だけ既存の収蔵庫内の空きスペースに移動可能な自然資料分野別収蔵棚を増設し、当面収蔵される資料をきちんと登録・収蔵保管し、将来自然系収蔵庫が増設された時、棚ごと新収蔵庫に移設するのが効率的と考えた。また、この点について当委員会の検討は不十分であったが、増築を考えるだけでなく、既存建物内で解決する方法はないかも合わせて検討を進めていくべきである。

4 新年度の企画運営会議

以上の報告のとおり、新年度の企画運営会議には作業部会を設け、必要に応じて専門家、業者を招き、見積りを含んだ具体的な段階的事業計画を作成する。進め方は企画運営会議を年度初め、中間、年度末に1回ずつ、計3回開催し、作業部会の進捗状況を検討する。また、作業部会は頻繁に開催し、展示更新、科学教育振興についての段階的具體案を幾つか作成し、企画運営会議に提示する。企画運営会議では作業部会の作業内容の検討だけでなく、博物館全体の事業進捗を中長期計画に照らして検討する。

なお、作業部会では展示の全面更新までの道筋、および研究の進展により学説が変わり更新しなくてはならない地質コーナーの更新部分の内容について予算を含めた具体案を示す。また、地質コーナーの展示解説にスマホ、タブレットを導入するに当たり、以後の運営を考慮し、どんなシステムで、どのような内容にするのかについて複数案を作成、か見積もりを含めて検討する。

科学教育振興については、①研究室・閲覧室の体験室への改修、②ロビー吹き抜け部分に1室増設、③八ヶ岳岳麓文芸館を養川コーナーに移設し特別展示室復活の3点について検討を深め、図面と見積りを作成する。

また、科学教育振興および集客アップに今すぐできることとして、モバイルプラネタリウム（移動式簡易プラネタリウム）導入計画案の詳細な詰めをする。更に自然系標本資料を収蔵する収蔵庫の検討も行なう。

それらを総合して、平成27年度中に懸案事項の具体的な解決案を何案か作成し、報告書としてまとめる。

5 終わりに

この報告書に含まれる数々の提案を単に総合博物館だけのもの、教育委員会だけのものとするのではなく、茅野市の施策として位置づけられ、総合博物館が地域になくってはならぬ市民の地域博物館として素晴らしい社会教育活動の場として発展出来るように整備が進むことを期待したい。

なお、当委員会として平成27年度には今後を見通した段階的かつ具体的な複数案の改修運営計画を作成する予定である。

<資 料>

今年度の検討状況

第1回 6月26日

- ・ 企画運営会議について (会議について共通確認)
- ・ 今後の協議内容について
- ・ 総合博物館の現状 (予算 事業内容 利用者数 課題)

<主な意見>

- ・ ロビーで夜のコンサートを開くなど、柔軟な運営も考えた方が良い。
- ・ ホームページが面白く無い。独自のサーバを持ったホームページを持って、双方向の活発な情報発信は出来ないか。
- ・ 現在のメンバーと予算で実施する事業数は限界だ。PR をしっかりやって、事業の定員の充足率を上げるように。
- ・ 他都市の予算と比較したいとの要望を受け、飯田市美術博物館、上郷考古博物館、飯田歴史研究所、守矢史料館、尖石縄文考古館と比較した。
- ・ プラネタリウムを導入して、科学教育の振興と入館者数を増やしたほうが良い。
- ・ 科学教育振興には、佐久の子ども科学館の科学教室や積水化学のホームページにある科学実験を参考にして内容の拡大と充実を図るように。
- ・ 学校の教員や生徒に博物館のことをもっと PR して欲しい。同時に学校団体が来館する際の「足」を考えてもらいたい。
- ・ 展示更新ですぐ出来る事はどんどん進めるように。自然観察の観察路作りなどはすぐ出来るのではないか。

第2回 7月31日

- ・ 10年後の総合博物館のイメージ (特徴、扱う分野、博物館活動、その他)
- ・ 10年後に向けて今すぐ取り組めることについて (展示、事業、その他)

<主な意見>

- ・ 博物館を拠点にした活発な市民活動が繰り広げられ、多くの市民が出入りしている博物館が望ましい。現在進めている市民研究員養成は良い取り組みだ。
- ・ 学校に対して博物館にはこんな資料がある、こんなことが出来るということをもっとアピールして学校団体に賑わう博物館にしくは

いけない。

- 学校へ出かけていく出前博物館活動も重要だ。
- 博物館は地域研究の拠点、生涯学習の拠点という考え方は重要だ。
- 理科実験など教科書に出ているものは全て揃っている、それ以上のものもあるというようにしないといけない。
- 総合博物館ということで特徴を出しにくくなっている。特徴を出すためには「八ヶ岳総合」ということで、八ヶ岳をメインに打ち出すことにより存在意義をアピールできる。
- 八ヶ岳をメインにしたものもひっくるめて、バーチャルに実感できるような展示を導入すべきだ。
- グーグルマップのストリートビューを取り入れないか。
- 八ヶ岳の写真を撮りためている人もいるので、そういう人の写真を借りて展示し、八ヶ岳をもっとアピールしたらどうか。
- 総合ということで、展示を自然、歴史・民俗と分けなくて手法もあるのではないか。全面的に展示を更新するときに検討してもらいたい。
- 博物館に来れば、調べ学習、理科研究など必ず何か手がかりや方法があるということをもっと学校に PR すべきだ。夏休み前に1～2日、そのための相談教室、アドバイス会等が開いたらどうか。
- 科学実験などにボランティアとして理科大の学生の応援を求めることが出来る。理科大との連携を強く持った事業展開を取り入れるべきである。
- 展示については、展示替えの具体的な青図を幾通りか作って検討を進めるように。
- 学習指導要領と関連付けた展示についての案内図を2階の階段上に出したらどうか。
- ゲンジボタルの調査など、地域に密着した取り組みも必要だ。

第3回 9月18日

- 理科大生が考えた展示更新と科学教育振興案について（大学授業で取り上げてもらい、若者の視点で検討してもらった。若者の着眼点を参考にした。）
- 10年後に向けての段階的取り組み（3年後 5年後 10年後）

<主な意見>

- 情報伝達的手段である新聞、テレビ、ラジオ、雑誌はもう古くなった。双方向の SNS を若者は使いまくって、ロコミのように情報伝達をしている。

- ・ 茅野市のシステムの中で考えていたのでは出来そうもないので、博物館独自のサーバを持ち、これからの時代は思い切ったことをしないと人は来てくれない。早い時期に独自のサーバを持つべきである。
- ・ 展示更新を進めるには展示品の撮影は自由にし、お茶を飲んだり、ちょっと休めるスペースがあったり、また、現地の実物にたどり着くナビ等のコンテンツを充実しなければならない。
- ・ 地域の特徴を出すには諏訪神社についての説明と御柱、諏訪鉄山、金山、養川は外せない。
- ・ 展示品にはどうぞ自由に触ってくださいというような、全体として今までの常識を変えた運営と、観客側に立った展示にしないといけない。
- ・ 市民研究員の各グループの成果を展示にして紹介したり、市民研究員に協力してもらって、それらをホームページでどんどん発信したらどうか。
- ・ 10年後のイメージを明確にし、段階的に進めるということは良いことだ。

第4回 10月17日

- ・ 展示更新の進め方について

<主な意見>

- ・ 段階的に出来るところから部分的に展示替えをし、最終的に全面更新を目指す。地質コーナー、自然コーナー、歴史コーナー、文芸コーナーへと年々順次行なうのがよい。
- ・ まずどのようなシステムで、どのようなコンテンツを取り入れたものかを明らかにした上で、スマホ、タブレットの導入をする。
- ・ 現在の展示の問題点を洗い出し、すぐ出来る事はすぐに行い、あとは対策を具体的に明らかにし、見積もりを取り、予算要求していくしかない。
- ・ 地質コーナーの問題点は研究の進歩により、学説の変わってきている部分をそのままにしていることだ。第1は八ヶ岳の噴出年代が変わったこと、第2は、現在はプレート・マントルによる地質の変化の説明が主流になっているが、現在の展示はそうっていない。
- ・ 地質コーナーの展示はプレートテクトニクスで追うか、火山で追うかどちらかだ。何を伝えるかによって変わってくる。
- ・ 現状に即して語るなら、火山中心のほうがわかりやすい。もっと古い昔についてはタブレットで説明したら良い。

- ・ 大方の人は大地の出来方に興味がある。そのニーズに応じた展示と解説がほしい。
- ・ 地質コーナーの改修については北沢先生の見解を聞くように。
- ・ 他館の新しい展示を見ると、タブレット、QR コード、イヤホンなどを使い、文字が少なくなっている。
- ・ 地元企業のエプソンと連携して、バーチャル眼鏡（ex. エプソンのヘッドマウントディスプレイ）を導入した展示が出来れば面白いし、展示の目玉になる。
- ・ エントランスのイノシシの置いてあるところから展示室の壁面まで、もっと壁面を上手に利用すべき。
- ・ 地質コーナーには陸水も含め、自然コーナーの入り口までを最初に扱うのがよい。
- ・ 養川、鉄山、金山の展示も入れて欲しい。
- ・ 分野別に多くの映像やコンテンツを用意し、その中から自分の知りたいものを選び出せるようにする。
- ・ 大画面でも見ることの出来る映像も必要。
- ・ サーバを外において独自のホームページを持ち、パソコンに強いボランティアの協力を得て独自の情報発信を活発に行なう。
- ・ 企画展は企画の段階から学芸員にウェブ上でつぶやかせることによって、すごい PR が出来る。
- ・ 学校の博物館系の教員の協力を得るように。そのために校長会、教頭会への働きかけを。
- ・ 上田の創造館では子ども向けの科学実験や工作を、小さいスペースを使って教員がやっている。担い手として博物館でも考えてみたらどうか。
- ・ 学校を動員するなら、市のバスを利用できるようにする等、足の確保が必要だ。

第5回 11月20日

- ・ 科学教育振興 施設の段階的整備について

<主な意見>

- ・ 段階的に進める進め方は、示された検討資料の通りでよい。
- ・ 既存建物を改修して実験工作等の出来る体験室を作る場所としては、水道・ガスの設備がしやすいことと、床がしっかりしていることから、現在の研究室、閲覧室が望ましい。
- ・ 文芸館を現在の養川コーナーに移設して、文芸コーナーにするのは良

いことだ。文芸館を文芸コーナーにするという了解を得る必要があるのではないか。

- ・ 文芸館を移設して特別展示室を復活するは博物館活性化に結びつく。
- ・ 研究室・閲覧室の代わりに、ロビー吹き抜け2階部分に床張りをし、現在研究室・閲覧室で行われている市民研究員の作業・学習、各種会議室、各種講座を行なう部屋の確保をしなければならない。
- ・ 改修は意匠変更につながらないのか。設計者との間で問題はないか。
- ・ 改修できた場合の、事業拡大に伴う指導者の確保、ランニングコスト等詳細な運営計画を明らかにしなくてはいけない。

・

第6回 12月19日

- ・ 新年度の事業計画について
- ・ 展示更新・科学教育振興について追加意見

<主な意見>

- ・ 観察会、講演会のPRする時、市民研究員公開講座というネーミングはやめて欲しい。普通の一般的な観察会、講演会とし、それに市民研究員も参加するというようにして欲しい。
- ・ 独自のホームページを持つための見積りを取り、予算要求しているのか。
- ・ 新年度(2015)の事業計画の中に、学校の博物館担当教員との打ち合わせ、検討会を計画し載せた方が良い。
- ・ その場合の教員の旅費については、事前に校長会、教頭会に話を通しておいて、校長命令で参加する場合は県費で出る。事前に校長会、教頭会に話を通しておくことが重要だ。そうしないと教員は出にくい。
- ・ 新年度事業計画は総花的で目玉が見えない。目玉を作るように。その場合、以前検討した中長期計画に基づいて、だから今年はこれが目玉だといえるようにしたものを、少なくとも3年先くらいまでは作るべきだ。
- ・ 展望室を改造してプラネタリウムを導入できないか。
- ・ 展望室に小型のプラネタリウム導入なら可能だ。しかし、小型なら固定せずに博物館でも公開できる、学校の体育館でも公開できるというような、可搬型の出前投影の出来るモバイルプラネタリウムの方が良い。

第7回 2月19日

- ・ エプソンのヘッドマウントディスプレイ(モベリオ)のデモを体験

- ・ 中長期の重点事業計画について
- ・ 移動式簡易プラネタリウムについて
- ・ 今年度の報告書について

<主な意見>

- ・ 中長期計画には来館者見込み数、歳入見込み数を入れたほうがよい。
- ・ 地域資料に光を当てていくには収蔵庫を一層充実させなくてはいけない。収蔵資料の検索はもちろん常に実物を見せられるようにしなくてはいけない。
- ・ 博物館の基本は博物館資料である。これからの時代は資料を死蔵しておくのではなく活用するためにキュレーション（編集）が必要。そこにデジタル展示がどうかかわってくるかが重要である。
- ・ 収蔵資料の実物を見せるときモベリオを通してみるといういろいろな情報が見えてくるようにできると、収蔵展示となり収蔵庫がものを保管しているだけの収蔵庫ではなくなる。
- ・ 今の館長がいるうちに、館長の専門性を発揮できるような目玉に打ち出したほうがよい。
- ・ 館長が現役でいるうちにプラネタリウムを設置して、それを運営しながら後継者を育ててもらったほうがよい。
- ・ 事業展開にどんな助成を期待できるか研究して、要望書や申請書を積極的に出し、他からの資金を導入して思うような事業展開をしたほうがよい。
- ・ モベリオのデモを行ったエプソンの人は、この博物館の展示は立派だと言っていた。今の展示を更新することだけでなく、今の展示を活かして何を付加するといきいきして魅力的な展示になるかも考えた方がよい。
- ・ 縄文時代の自然環境などを扱えば、縄文プロジェクトに組み込んだ事業展開ができる。

<今年度の報告書について>

今年度の会議はこれで終了とし、報告書については原案を各委員に送付し、校正したもので事務局が成果物を作ることになった。

報告日 平成 27 年 3 月 26 日

名 簿

委 員

岡野 勇二	八ヶ岳環境教育企画
沖野 外輝夫	信州大学名誉教授
小口 徹	有識者
木村 正弘	諏訪東京理科大学教授
小山 明人	菌類懇話会事務局長
五味 嗣夫	諏訪東京理科大学教授
田中 克明	茅野市泉野小学校校長
濱 篤	博物館協議会委員長
両角 英晴	日本野鳥の会

事務局

牛山 英彦	茅野市教育長
木川 亮一	茅野市教育委員会生涯学習部長
守矢 昌文	茅野市教育委員会文化財課長
若宮 崇令	茅野市八ヶ岳総合博物館長
小林 健治	茅野市八ヶ岳総合博物館係長
柳川 英司	茅野市八ヶ岳総合博物館主査